

近世水論訴訟における戦略と影響要因

——筑波地区を事例に——

王 翔

はじめに

江戸時代、日本各地において農業用水をめぐる論争が数多く発生し、水論は「農村の年中行事とも云ひ得る程に一般的な現象」であったと言われている¹。農村社会の水論に対し、幕藩も大きな関心を持っていた。その理由として、水田農業が近世の国家財政を支える根幹であったことは言うまでもないが²、それだけではない。水論は一般的に集団紛争として行われ³、他の民事紛争より規模が大きいに、農村社会の安定に影響を与えかねなかった。用水の問題はまさに農村の死活と天下の安泰にかかわるものであった。

農村社会の用水秩序に対する幕藩国家の関与形態の一つとして、水論訴訟⁴がある。これに関し、先行研究ではいくつかの重要な知

見が示されている。

西崎氏が指摘したように、幕府の法令において、治水に関しては数多くの規定が公布され、その内容は詳細を極め、また重要な河川に関しては特別の治水令さえも存在していた。しかし、灌漑用水の権利義務については、わずかに公事方及び地方その他の覚書に同一趣旨のものが散見するに止まっており、しかも、その規定内容は簡単で断片的である⁵ため、農業水利の詳細な権利関係の決定は、水論訴訟が提起される場合において、当該訴訟を担当する裁判官の比較的自由な判定に委ねられていた。裁判は単に権利の有無是非の判別に止らず、行政行為的な作用まで果していたのである⁶。

これらの事情は結果的に二つのことを引き起こした。その一つは内済の促進である。内

1 喜多村（1950）：470頁。

2 江戸時代では、貢租の対象となった高請地の大半が水田であった。享保年間（1716-1736年）の田畑面積についてみると、水田163万余町歩、畑地132万余町歩で、水田はもちろん、畑地においてもその貢租は一般的に米納であった（古島1941：159頁）。弘化元（1844）年の幕府財政収入のうち、金貨に換算した年貢収入額が経常収入の90.8%にあたる1,658,390両に達し、臨時収入と合わせた総収入に対する比率も41.4%の1位で、2位の貨幣改鑄益金の約2倍であった（古島1963：98頁）。

3 灌漑用水を確保するために、村同士が水利組合を結成し、堰や溜池、用水路などの施設を造って水を引き、また施設の管理と修繕も共同で行ってきた。ほとんどの水論が水利組合同士もしくは同じ組合内部の村同士で発生したものである。なお、水論が村内部で発生し、個人が争論の主体になっていた事例もあるが、これについては畑中（1970：239-242頁）を参照。

4 近世の訴訟は民事訴訟にあたる公事出入筋と刑事訴訟にあたる吟味物筋に分けられ、このうち、公事出入は論所・公事・仲間事・身分に関する訴の四つに区別され、水論は地境論とともに「論所」に含まれていた（小早川1957）。すべての訴訟が受理されるとは限らないが、水論は原則的に受理するとされた（小早川1957：420頁）。

5 その原因は、一般に成文法規の制定に冷淡であった徳川時代の立法上の傾向と、画一的立法が地方農民間の旧来の関係に大変動を与えることを避けたいという幕府の思惑によるものだと見られる（西崎1927a；喜多村1950：67頁）。

6 西崎（1927a）。

済とは、現行法上の調停に近似し、しばしば仲裁と和解の概念をも包含する紛争解決方式であり、江戸時代の民事訴訟では一般的な原則とされていた⁷。水論訴訟で農村の水利秩序を詳細に規定する立場にあった裁判役人にとって、この方式は、自ら裁許を下すより、形式的に幕藩権力の介入を伴う必要がなく、自らの責任回避に好都合であった。そのため、水論において内済がいっそう勧奨された⁸。水論訴訟が管轄の裁判役所に提起されてから、担当役人が裁判のすべての段階において内済を慫慂した⁹。建前上は幕藩が関与しないことになっていたが、実際は裁判役人の意向が内済に反映されるのがむしろ一般的であった¹⁰。

また、江戸時代の水論裁判が司法的というよりも行政的であったことは、訴訟の中で理非以外の要素が温存される余地を作ることとなり、水論訴訟の政治化をもたらした。訴答双方にとって、水論は証拠よりも政治的戦略で勝負するものとなった。喜多村氏の指摘に

ある、当事者が背後にある領主の力を借りることで水論訴訟に影響を及ぼそうとしたことも、このような戦略の一例である¹¹。

小論では、これらの先行研究を踏まえ、以下の二点、即ち（１）政治化された近世の水論訴訟において、訴訟当事者は具体的にどのような戦略を立てて自らの利益を守ろうとしていたか、（２）幕藩国家が水論出入を解決するために用意した制度的枠組みをどのように評価すべきか、について論じてみたい。

小論では常陸国筑波郡桜川流域を対象地域に選定し、つくば市筑波地区（旧筑波町）の史料に基づいて以上の課題を検討する。筑波地区の古文書残存状況は各村落に差があるものの、全体から見れば良好だと言える¹²。また、本文で詳述するが、この地区で発生した江戸時代の水論は、小論の課題にとって極めて適切な事例である。

構成は、第Ⅰ節で水論訴訟において領主権力の影響を利用する戦略を分析し、第Ⅱ節から第Ⅳ節までは権力の影響に対抗するための

7 小早川（1957）：77、89-90頁。現代では裁判が基本的訴訟手続きで、調停制度が補助制度にすぎないが、近世期の内済制度はむしろ民事裁判の原則であった（小早川1957：82頁）。なお、刑事事件においても内済が認められる場合があった（陶山1991）。

8 西崎（1927a）；小早川（1957）：427頁。

9 近世裁判の管轄は、訴答双方が同一領主の支配に属するか否かによって分けられていた。同一領主なら、幕府直轄地である御料所の場合は御料所代官、私領地の場合は各私領地頭役所に繫属するが、「支配違」なら幕府の管轄役所に繫属する。支配違の水論に関する裁判管轄を略述すれば、（１）原告が御料または御預所であれば、関八州内外を問わず勘定奉行初判、但し御料または御預所相互の争訟は勘定奉行内寄合公事。（２）原告が関八州内の私領であれば勘定奉行、関八州外の私領であれば寺社奉行初判。（３）原告が一定格式を有する寺社か寺社領であれば、関八州内外を問わず寺社奉行初判。（４）原告に御料私領入り交るときは、宝暦六年以前は村数の多少により、明和八年以前は事件に関与した程度の軽重によって、御料の村々の数が多いか重く関与するか村数ないし軽重が相等しければ勘定奉行初判で、そうでなければ寺社奉行初判であったが、明和八年以降は一律に勘定奉行初判の慣例となった。（５）関八州外でも畿内八ヶ国については特例が設けられて享保七年以降は、（イ）京都、大阪両町奉行支配国内支配違の争訟はそれぞれ支配町奉行管轄、（ロ）両町奉行支配国相互の争訟は、御定書所定の寺社奉行初判公事でなく、相手方支配町奉行へ出訴の慣例、（ハ）両町奉行支配国から畿外他国にかかる争訟は京都・大阪・伏見・奈良・堺の町方を原告とすれば寺社奉行初判、在方が原告であれば関八州外裁判管轄の定によった（大竹1951）。なお、水論訴訟の進行過程については、小早川（1957）・春原（1965）・川島（1964）の諸研究を参照。

10 中田氏はこれを「強制的内済」と呼ぶ（中田1943：878頁）。

11 喜多村（1950）：473-474頁。

12 たとえば、J水利39号で言及された小田村組合の関係書類はすべて残っており、同史料集に収録されている。また、貞享三年から天明三年までの約百年間を記録した『上菅間村年代記』（G2号）で言及された水論の関係書類もほとんど保存されている。

I、権力的背景

水論訴訟の当事者たちと、幕藩権力との関係にそれぞれ親疎の格差があった場合、それが訴訟の結果に大きな影響を与える可能性は高い。享保年間の農政書『民間省要』においても「我を立て人の下知を不用、諸事我が儘多く、物に害をなし締らざる物なり、是等は畢竟其頭々の時めく君寵に、その知行の百姓迄其心驕」と述べられている¹³。このような傾向は、特に訴訟が支配違のため幕府の裁判役所に繫属された場合によく見られる。

貞享四（1687）年、筑波郡大島村・国松村が上流の真壁郡酒寄村を相手に、両村組合堰土取場の所在と、用水を留められた問題をめぐり、幕府に提訴した¹⁴。評定所が翌年下した裁許は、土取場に関しては酒寄村側の不法を指摘し、訴訟方の主張を完全に認めたが、その一方で、用水の問題に関しては疑問をいだかせる判定を下した。

大島・国松両村の組合堰は酒寄村地内で桜川を塞ぎ止め、用水堀は酒寄村地内を通ったあと両村に入る。訴状によると、貞享二（1685）年七月廿五日と翌年三月廿五日、酒寄村が二度も両村の用水堀を留めたという。その理由について、酒寄村は、満水の節の逆水入を防止するためだったと弁解した。評定所の裁許は、大島・国松両村に対し、「用水堀之堤自地形壑尺高、其上高サ三尺横三尺六寸之石橋致之、用水之分量限之」と命じた。裁許は酒寄村の田地を水損させてはいけないということも強調したので、上記の内容はそのための措置にも受け取ることができる。しかし、どうやら本当の目的は両村の堰水を酒

寄村に分けようとすることにあったと思われる。なぜなら、この裁許は、酒寄村が自らの田地に引水するために訴訟方の用水を留めたと指摘しながらも、そのような行為を止めようとしなかったからである。

この裁許を、対岸の筑波郡上菅間村と真壁郡石田村の水論に対して評定所が寛文九（1669）年に下した裁許¹⁵と対照してみると、二件の判決内容には大きな差が見える。石田村が自らの地内を通る上菅間村の用水堀から水を引こうとするこの争論に対し、評定所は石田村による引水を認めなかった。石田村が上菅間村堰の設置と普請にかかわっていないことや、用水が別の場所にあることがその理由であるが、この二点は酒寄村の場合でも同じである¹⁶。二件の水論はきわめて似ていたものの、裁許の結果には雲泥の差があったと言える。

注意すべき点はもう二つある。まず一つには、訴訟が裁判役所に提起され、役所が相手方の出頭を差日に命じた場合、相手方は返答書を作成し、差日までに提出しなければならなかった¹⁷。しかし、大島・国松両村が訴状を提出したのは貞享四年二月、酒寄村が返答書を提出したのは同年十一月であった。この間には九ヶ月の経過があり、他の事例と比べるとはるかに長い。また一つには、返答書の提出から裁許が下されるまでの期間は比較的短いことである。裁許の日付は貞享五年二月廿五日、わずか三ヶ月ほどで裁判は終結した。大島村と国松村の訴状は長い期間幕府に取上げてもらえず、水論の理非を審理する時間もそれほど充分ではなかったということになる。

13 日本経済叢書刊行会（1914）：321頁。

14 J水利1-4号。

15 J水利52号。

16 上記の大島村・国松村と酒寄村との水論裁許絵図から、酒寄村の堰がその上流にある椎尾村地内に設置されたことが確認できる（C III-8号）。

17 小早川（1957）：450-452頁。

筑波地区における訴訟関係期日判明の水論

水論当事者	訴状提出日	返答書提出日・差日	裁許・内済の日
小田・大形⇔太田	寛文九年五月	寛文十年二月	寛文十年三月廿八日
大島・国松⇔酒寄	貞享四年二月	貞享四年十一月	貞享五年二月廿五日
筑波・沼田⇔臼井・神郡	元禄六年六月	元禄六年六月廿五日	元禄七年十一月十四日
沼田・筑波・大島・国松⇔北条・君島・小沢・小泉・大貫・杉木	文化十四年正月	文化十四年二月十三日	文政三年八月四日
上菅間⇔大島	文久二年九月	文久三年二月十三日	文久三年九月

史料：J水利1-4・17-24・33-35・61・80-84号。

上の表が示したように、寛文年間に発生した筑波郡小田・大形両村と同郡太田村との水論も、訴訟方の訴状提出から相手方の返答書提出までは九ヶ月かかったのにも関わらず、返答書の提出から訴訟終結まではわずか一ヶ月ほどであった¹⁸。

この三ヶ村は組合堰を有し、取り入れた堰水は太田村・小田村・大形村の順に流れ、三ヶ村の田地を養っていた。初期は用水需要量に対して水量が比較的に充足していたためか、この組合内部では旱害時の分水規定を設けていなかった。しかし、小田村の新田造成によって、用水が不足に転じた。寛文年間、それまで溜池として利用されていた小田村地内の古城の堀が埋められ、溜池用水が減ったこと、また田地が増えたことにより、用水不足の問題が突出してきた。

寛文八（1668）年、夏からの日照り続きのため、三ヶ村が用水をめぐる協議し、「田地高二応し、太田村え一日壺夜、小田村・大形村三日三夜之わりニ相定」め、下流に水を引く時は太田村一番目と二番目の水筒（樋）を留め切ることとし、用水配分を合理的な番水制¹⁹に切り替えた。しかし、翌年になると、小田・大形両村から議定のとおりに番水の実施を求められた太田村は、「定を破り、我が

ま、仕水筒押明ケ申ニ付、番之者共明ケさせ申間敷と申候へは、太田村之者共大勢かけつき理不尽ニ一ノ水筒を押明ケ」、さらに小田・大形両村の詰問に対し、「以来水筒留させ申儀は罷成間敷候、其上わけ水ニ定引可申」と返答した。太田村はその後の訴訟で「(小田・大形村之者)無鉢成儀申掛、番水ニ可仕と拙者共方へ断御座候得共、前々之例次第と申承引不仕」と主張し、番水合意の存在を否定した。

小田・大形両村の村役人は、太田村が番水実施に応じるよう、太田村の領主である土浦藩の代官に願い出たが、「先季を破候儀罷成間敷と被仰御用無御座候事」になったため、幕府に出訴した。この一件は、寛文十（1670）年三月に内済の形で片付けられた。内済の内容は、太田村の水筒を1尺四方から7寸四方に相究めることと、小田村一番目の水筒の地形を見分してから太田村一番目と二番目の水筒を伏せることに止まり、肝心な番水制には至らなかった。

上述の二件はなぜ訴訟過程においても解決結果においてもある一方の当事者に偏っていたのか。二件の当事者をそれぞれ比較してみる。

村高は、酒寄村が881.224石、大島・国松

18 J水利33-35号。

19 近世の番水制については、喜多村（1950：309-318頁）を参照。なお、番水制による用水配分は中世にも見られる（寶月1943：174-245頁）。

両村の合計が2118.534石、太田村が390.63石、小田村が1718.724石となっていた²⁰。もし影響力が村の経済力に関係するならば、大島・国松両村と小田村が有利なはずだが、実際はその逆であった。地理的位置から言えば、酒寄村と太田村はともに上流にあり、いわゆる上流優先が考えられる。しかし、上菅間村と石田村の水論事例が示したように、上流優先が他村の人工用水に及ぶことは認められない。また、同じ用水組合内部において、番水の順番で上流優先はありうるが、渇水時の番水実施を妨げるものではないであろう。

したがって、当事者の背後にある領主の権力的格差が唯一とは言えないまでも、重要な原因であったと考えられる。酒寄村の領主は笠間藩井上氏、大島・国松両村の領主はその分家に当たる旗本井上氏であった²¹。双方の間に存在していた権力的背景の違いが訴訟の過程と裁許の結果に影響を及ぼしたことは、容易に想像できよう。

一方、ちょうど水論の時期に太田村の領主となった土浦藩主土屋数直は知行高45,000石の大名で、幕府の老中も長年務めていた²²。小田村の後人は、20年後に両村の間で起きた山論²³を回顧し、「此時（太田村の）御領主様ハ土屋相模守殿にて、京都御所司代より宿老に御進みあるへき際にして、御権威ますます盛なり、（中略）、于時（小田村領主の）横山殿にハもハや御三代御相伝の今日にして、御先代長知公の余輝や、うすらく」と歎いている²⁴。これは、番水制をめぐる水論に対しても適切な解釈であろう。

このように、領主の力が水論訴訟に影響を

与えることはしばしばあった。喜多村氏は、一般的傾向として幕府直轄の御料村が水論で最も強大であり、大藩或いは幕府と特別の親近関係にあるものはこれに次ぎ、さらに、たとえ小藩であっても領主が時の幕府の要職にある当路者でありまた寵臣である場合には、大藩の威を凌ぐことがよくあったと指摘している²⁵。

Ⅱ、加勢

前文で引用した小田村の言葉が示したように、水論訴訟の結果が権力的背景の違いによって影響されかねないことは村々が一般的に意識していた。この点で有利な村はもちろん領主の力を頼りにするが、不利な村は相手の権力的優勢を抑止する戦略を必死に考えた。

その一つに加勢という戦略がある。加勢は水論訴訟ではよく見られる現象で、他村に加わってもらい、利益関係者として登場させることによって、自らの権力的背景の弱さを補完し、相手の優位を牽制しようとするものである。

天明二（1782）年、上菅間村とその上流に位置する石田村との間で、石田村悪水堀をめぐる出入が起こった²⁶。この悪水堀の落ち込み先に上菅間村の用水堀があり、悪水をいったんこの用水堀に落とし、さらにそれを桜川に落とすという面倒な方法をとったため、悪水堀の浚いをめぐる水論が発生した。

石田村をはじめ、上菅間村と相对相済の形で解決しようとした。しかし、石田村が知行

20 D65号；真壁町歴史民俗資料館（2002）：25頁。なお、小田・大形両村対太田村の水論は主に小田村と太田村との争論のため、ここでは大形村の状況を省略した。

21 笠間藩井上氏及び旗本井上氏については、笠間市史編さん委員会（1993：378-379頁）・鈴木（1968）を参照。

22 土屋数直について、土浦市史編さん委員会（1975：343-346頁）を参照。

23 この山論は用水問題との関連性があるので、第Ⅳ節で詳述する。

24 長島尉信著『南二荘』（E7号、76-77頁）。

25 喜多村（1950）：473頁。

26 A 桜川・観音川3号、G2号、J水利55号。

高の少ない四人の旗本による相給地であったためか、相对相済に応じた上菅間村がその証文を知行高3,000石の領主本多氏²⁷の江戸屋敷に届けると、「以て外ニ御立腹」される結果を招いた。ここに至り、石田村は訴訟を起こさざるをえなくなり、排水問題の利益関係者でもある、石田村上流の倉持村・中根村・山王堂村の三ヶ村も訴訟方に加わった。この三ヶ村も石田村と同様、いずれも小領主による相給地であったが、11人も領主が関わったこと、山王堂村の一部が幕府直轄の御料でもあったことが石田村の弱点を補強することとなった²⁸。

この悪水堀をめぐる、文政八（1825）年、石田村は悪水堀の近くに組合堰をもっていた本多氏所領の中菅間村・池田村・磯部村との訴訟も起こした²⁹。その際は、上述の倉持・中根・山王堂三ヶ村の他、旗本井上領の大島村も石田村の加勢に動員された。以上の二件は、いずれも熟談内済によって石田村の要望が満たされた形で解決された。

加勢は水論訴訟で立場の弱い村にとって、不利を回避する有効的な戦略の一つであるが、そこにはリスクも潜んでいた。寛政年間、上菅間村一村による単独堰の高さをめぐって大島村と争った際³⁰、上菅間村が用水堀下流の中菅間村の加勢を受け、返答書に中菅間村西田式十八町歩のことを書き入れた。しかし、これは後年、中菅間村の上菅間村用水への権利主張に利用されてしまった³¹。

加勢の動きに対し、相手の当事者は等閑視することなく、瓦解工作を模索する。文化十三（1816）年、筑波郡沼田村が同郡北条村組合堰四ヶ村と水論になった³²。沼田村地内に設置された北条・小沢・小泉・君島四ヶ村の組合堰について、堰の高さなどをめぐる双方の齟齬をきっかけに、翌年、訴訟に発展した。沼田村の領主は知行高わずか1,500石の筑波山知足院³³であったのに対し、相手の四ヶ村の領主は知行高95,000石の譜代大名土浦藩土屋氏であった。筑波山知足院は幕府から厚遇されていた神領であったものの、土浦藩の影響力に比べると、やはり見劣りがするようであった。この不利を意識していた沼田村は、同領の筑波町及び旗本井上氏領の大島・国松両村に加勢を要求した。訴訟は訴状提出の翌月に差日となり、その後、審理が長期化した。

水論の期間中は、江戸幕府の規定による仮用水の措置が講じられるものの³⁴、裁判が長引き、北条村組合にとって用水面での制約が甚大なものとなり、きわめて不利な状況となった。この局面を打開するため、北条村側も近隣の大貫村と杉木村の加勢を受けた。大貫・杉木両村は北条村組合に属してはいなかったが、沼田村に設置された北条村組合堰からの用水は最初に両村地内を通っていたため、慣行として両村もその堀から農業用水と飲用水を取る利益関係者であった³⁵。そして、最も重要な点は、大貫・杉木両村が沼田村に

27 3,000石のうち、分家領の500石も含む。旗本本多氏の支配状況について、齊藤（1998）を参照。

28 石田村は小林氏・青沼氏・前島氏・天野氏、倉持村は曲淵氏・守能氏・大木氏・折井氏、中根村は朝比奈氏・川副氏・小林氏、山王堂村は土屋氏・折井氏及び幕府の領地となっていた。幕府以外の11名の領主については明野町史編さん委員会（1985：337-366頁）を参照。

29 A 桜川・観音川6-9・12号、J 水利75-76号。

30 A 桜川・観音川5号、J 水利56-57号。

31 J 水利72-74号。

32 J 水利17-24号。

33 筑波山知足院の支配について、筑波町史編纂専門委員会（1989：636-647頁）を参照。

34 小早川（1957）：425頁。

35 大貫村と杉木村が北条村組合用水の利用に至った経緯は明らかではないが、両村はともに田高80余石の小村で、北条用水以外、神郡村の余水も利用していたので、北条村組合への影響は比較的小さかったと考えられよう（H 村明細帳17・20号）。

加勢した大島・国松両村と同じ領主であったことである。北条村側はこの点を利用して相手側の加勢を瓦解しようと動き出した。文政二（1819）年四月、大貫・杉木両村が領主井上氏の役所に願書を提出し、沼田村に加盟した大島村と国松村を厳しく批判した。この一件は結局、翌年八月の評定所裁許により、四年近くの訴訟に終止符が打たれた。

Ⅲ、離間

水論が同一領主の知行地内で発生した場合においても、判定の結果に当事者と領主の関係が影響することがある。嘉永五（1852）年、大島村と国松村の間で勃発した水論はその一例であると同時に、権力的背景による不利を回避するもう一つの戦略を示している³⁶。

堰を共同で運営していた両村は、大島村が用水堀の上流、国松村が下流という位置関係にある。当年初夏より日照りが続くなか、川下の北条村は用水無心のために大島村名主平右衛門を訪れ、融水を承諾してもらった。六月十七日夜、北条村に用水を引くため、平右衛門らが国松村への相談無しに、大島村地内にある国松村の三左衛門堰を強勢に切り払った。国松村と口論の中、「平右衛門懷中致居候合口取出し、其外之者共理不尽ニ携居候棒竹鎚等」を構えて生死をかけた喧嘩に及ぶにあたり、水論が勃発したのである。

平右衛門が国松村の三左衛門堰を切り払っただけでなく、両村昼夜隔番の堰水だと主張したことは、国松村に「平右衛門重乱妨仕候得□□候ては後年何様取計可仕成哉難計」といった脅威を与えた。国松村は平右衛門らの不法行為を領主側に訴え、厳しく処罰する

よう強く求めたが、取調べは進まなかった。その後、国松村は「江戸御上屋敷並ニ御本家様並時之御老中牧野備中守様、御勘定所本多加賀守様え再度越訴」を行った。しかし、それにも関わらず領主側から度々内済を命じられ、八月、平右衛門ら四人が詫一札を国松村に差し出し、事態はひとまず平右衛門の思い通りに収束した。

平右衛門は文政九（1826）年より26年も大島村名主を務めてきた領内古参の村役人であり、在地性の薄い旗本にとって農村支配に欠かせない存在であったに違いない。領主側との強い結び付きを利用し、「平右衛門外三人之者共御陣屋御役人並地懸り御役人え夫々内願」した結果、事態は軽く収束したのである。

しかし、同年十一月までに下されたと推定される³⁷大島村関係者への申渡しによると、名主の平右衛門は役儀及び名字帯刀の取上げと押込を、平右衛門の息子で名主見習の平兵衛は役儀の取上げを、百姓代の与七と山守の九兵衛は役儀の取上げと押込をそれぞれ命じられ、百姓の平左衛門は内済したため、処罰は受けなかった。

このような事態の大転換には、大島村で起きた村方騒動が関係したと思われる。平右衛門が下流の北条村に水を引くためには、国松村の用水はもちろん、大島村の用水も締め切らなければならなかった。これは大島村内部でも一部の百姓の不満を呼んだ。八月、大島村小前百姓30人ほどの惣代として百姓清兵衛・吉兵衛が名主平右衛門を退役させるよう、領主の在地役所と江戸役所にそれぞれ訴状を提出した³⁸。二通の内容を比べてみると、興味深い差異が見られる。まず、最初の訴状では用水不法だけを追及したのに対し、二通

36 B121-123・125・135号、J水利10-12号、K村方騒動59-64・68-69号。なお、白川部（1978）は大島村の出来事を幕末に発生した村方騒動の一事例として論考したが、三左衛門堰水論との関係に触れておらず、また、村方騒動の対立関係についても再検討する必要があると思われる。

37 同年十一月、北条村が大島村の領主に、平右衛門を宥免して役儀に復帰させるようお願いした。

38 江戸役所に提出した訴状は八月九日とある。在地役所に出した訴状は八月だけと書かれたが、内容などから見ると八月九日の前に提出されたものであると推測できる。

目は用水以外の問題も二つ取り上げて平右衛門の悪行とした。つぎに、二通目には、「前々より名主役式人にて勤来候処、近来平右衛門害人にて相勤、勝手儘ニ取斗」と強調された文言が新たに書き入れられた。さらに、二通目の最後に差添人として組頭杳右衛門の名前が添えられている。杳右衛門は村内古参の組頭として、平右衛門が名主役を独り占めすることに不満を持っていたのであろう。用水騒動を好機だと感じた杳右衛門は、平右衛門を倒すことを目指して百姓らの行動に加わったことが考えられる。

実は、大島村の騒動には国松村が関与していた。この一件について、騒動リーダー格の清兵衛が後年、「国松村え馴合、小前三十人惣代と申立、水論一件御調中も不顧、江戸表迄罷出越訴仕、御苦難ニ相成」と批判された。どうしても平右衛門を退役に追い詰めようとしていた国松村は、訴訟がうまく進まないなか、暗に大島村内部の騒動を推し進め、結果的に奏功した。

両村の水論は落ち着いたが、大島村では名主役をめぐる権力争いがますます熾烈になり、村方騒動が繰り返された。

名主の座を目指した組頭杳右衛門は小前百姓の行動に乗じて見事に平右衛門を失脚させた。平右衛門も名主役復帰のため様々な手を打った。同年十一月、北条村は大島村の領主に平右衛門を復帰させるようお願い出た。これは平右衛門の意向によるものであろう。そして、翌嘉永六年八月、平左衛門・市右衛門・忠兵衛・九兵衛・与七・隼助の六人が百姓五十人惣代と称し、元名主平右衛門及び六名の組頭を私欲押領として訴えた。この一件は、嘉永七年四月に内済した。平左衛門・九兵衛・与七の三人は三左衛門堰水論の時、平

右衛門と行動を共にしたにも関わらず、平右衛門を提訴したのは不思議に見えるが、内済の済口一札を読む限り、いわゆる私欲押領の条々は不法までとは言えず、平右衛門に打撃を与えるほどのものではなかった。この騒動はむしろ、平右衛門が杳右衛門を牽制するためのしわざだと見做すべきである。結局、この一件によって名主役選出が難航し、平右衛門側が一部の村役を手に入れた。

しかし、事態が落ち着いて半年も経たないうちに、庄助・清兵衛・又右衛門の三人が、前回騒動の惣代全員を含む七人を名主選出妨害として訴えた。庄助は以前から組頭を務め、この時も組頭役にいたようである。後年の史料³⁹から、平右衛門への「宿意」をもっていた庄助は杳右衛門に近い人物であったと推定できる。この騒動は杳右衛門による反撃だと言えよう。騒動の結果を示す史料はないが、その後も大島村では名主不在の状況が続いた。

安政六（1859）年暮になると、平右衛門が名主役に復帰し、杳右衛門も新たに名主になるという形で双方が妥協した。二人とも名主になったとはいえ、実権は依然、平右衛門が握っていた。双方の衝突は早くも翌万延元（1860）年に発生した⁴⁰。

平右衛門の帰役を最も警戒していた国松村も安心していられなくなった。文久元（1861）年九月、領主井上氏の江戸屋敷及び斎藤伊豆守に張訴が行われた。後者への訴状は、平右衛門による複数の行為を「罪状」として取上げ、退役させるようお願い出るものであった。訴状の署名は「大島村・国松村」となっているが、用水不法に関する内容が紙幅の半分以上に及んでいることから、張訴を主導したのは国松村だと思われる⁴¹。

39 万延元（1860）年の史料（K 村方騒動68-69号）に、庄助が杳右衛門と一緒に行動したことが書かれている。

40 水門伏替をめぐる、平右衛門が権威を振舞い、組頭庄助らに訴えられた。

41 同年十二月、三左衛門堰一件の際、大島村の村方騒動をリードした清兵衛が張訴の張本人とされ、拷問を受けた。

翌文久二（1862）年八月、国松村の惣百姓が一通の議定連印帳を作った。それによると、大島村にある国松村の用水堰が大島村による新川開鑿の影響で保ちにくくなり、大島村と交渉したが、聞き入れてもらえなかった

ため、やむを得ず出訴することになった。これに関する他の史料はないため、その後の結果は知り得ないが、元治元（1864）年、天狗党による武器調達に関して大島村が領主役所に提出した届書⁴²にある、村方三役の八人の

大島村役人と村方騒動関係者

氏名	天保十三年	嘉永五年	嘉永七年四月	嘉永七年九月	万延元年
平右衛門	名主	名主◎※	◎		名主◎
平兵衛		名主見習◎※			
杳右衛門	組頭	組頭（◆に差添）	組頭◎	組頭	名主
善左衛門	組頭	組頭	組頭◎		
三郎兵衛	組頭		組頭◎		
太郎左衛門	組頭		組頭◎		
佐兵衛	組頭				
吉右衛門	組頭				
五郎右衛門	百姓代	組頭（◎に差添）	組頭◎	組頭	百姓代
庄助		組頭	組頭◎	（組頭？）◆	組頭◆
忠兵衛			◆	組頭◎	
五郎兵衛				組頭◎	
源次郎				組頭	
藤作					組頭◆
弥平次					組頭◆
嘉兵衛				組頭見習	
太郎右衛門				組頭手伝	百姓代
平左衛門		※	◆	組頭手伝◎	
与七	百姓代	百姓代※	◆	◎	
周助				百姓代（◎に差添）	
伊右衛門					百姓代
藤兵衛					百姓代
治左衛門					百姓代
九兵衛		山守※	◆	山守◎	
清兵衛		◆		◆	
吉兵衛		◆			
市右衛門			◆	◎	
隼助			◆	◎	
又右衛門				◆	

天保十三年の村役人状況は K 百姓一揆25号による。

◆は批判する側、◎は批判される側、※は三左衛門堰水論で領主から申渡しを受けた者を指す。

42 1 天狗党拳兵と村民 3 号。

署名のなかには、平右衛門の名が入っていない。天狗党事件の重大性から考えると、もし平右衛門が名主であったなら、署名していただいであらう。急死でない限り、失脚が引退しか考えようがない。もし退役が事実であれば、相手村の騒動を巧みに利用する国松村の戦略が再び成功したことになる。

IV、声東撃西

水論で不利な結果を変えるために、別の交渉材料を利用して相手の譲歩を迫る戦略をとった事例もある。

前述した番水をめぐる小田・大形両村と太田村との争論は、ひとまずは内済したが、番水制に触れることなく問題を先送りしただけの解決であったため、その後も番水実施をめぐる攻防が展開された。貞享四（1687）年六月、日照りが続き、小田村は水門より水を汲みたいと太田村に願ひ出たが、太田村は自村の引水が終わってからにするようにと返答した。これに対して小田村は再び要求したが、また拒否された。太田村名主の庄兵衛はこの件について覚書で「重ていか様なる事も候ハ、此通り心得可申候」と述べ、番水制を絶対に受け入れないと決意した⁴³。

それから二年後、小田村と太田村との間で激しい山論が勃発した。小田村が起こしたこの山論の本当の狙いは用水問題にあったと思

われるが、その理由を述べる前に、まず山論の過程を見ていく⁴⁴。

太田村は近世初期もともと小田村の一部であったが、のちに小田村から独立して分村となった⁴⁵。太田村は桜川沿岸に成立した村落で、用水の面では小田村の上流に位置する有利な地位にあったが、入会の面では村内に入会地がなかったため⁴⁶、親郷だった小田村にある宝鏡山を頼らなければならなかった。しかし、元禄二（1689）年五月になると、小田村が太田村に対し、入会地への立ち入り禁止を宣言した。六月十七日、草刈から帰る途中の太田村の二人が小田村の者に鎌を取られ、再び警告された。さらに小田村は、七月三日から六日までの間に、四回にわたり入会地に行き来した太田村の村民が所有する鎌43具、荷鞍5口を取り上げた。太田村はこの山論を幕府に提訴し、翌年十一月の裁許によって、太田村の入会権が認められた。

この山論の原因について、小田村の後人は、入会地で伐採するための山銭を出さないから太田村の立ち入りを禁止したのだと述べた⁴⁷。小田村は山論訴訟の返答書でも、山銭を払っていなかったことを理由の一つとして挙げ、太田村の入会権を否定した。しかし、入会権の有無が騒動の本当の原因とは考えにくい。第一に、入会の問題をめぐって、小田村と周囲の他の村々との山論は寛文四（1664）年までに解決されており⁴⁸、入会が

43 J 水利37号。

44 J 入会30-36号。齊藤（1970）と白川部（1990）の両論文もこの山論について考察を行った。斎藤氏は両村の間で発生した水論と山論を近世村落の成立過程における出来事と位置付けたが、両者の関連性には言及しなかった。一方、白川部氏は山論における結集のあり方に注目し、小田村は「未開の力に支えられている」、太田村は「文明を確かに踏まえている」と結論付けた。

45 『邑正便覧』（長島尉信著・瀬尾都宗補）と『南二荘』によると、小田村は慶長七（1602）年の検地を受けた後、慶長十五（1610）年まで御料地であった。同年から佐久間氏の知行地となった際、村高2069.354石のうち、390.63石分が次男に分与され、これによって太田村が小田村から分離した（D63号、196頁；E7号、61頁）。

46 入会地での伐採をめぐる、天和二（1682）年、太田村の六人が小和田村の御林で松木を切り取る出入が起こり（J 入会29号）、また、貞享四（1687）年、青木・辻・菖蒲沢・小野越・仏生寺の五ヶ村の山で草盗が発生し、疑われた太田村は村内に草盗者がいなかったと報告した（J 入会28号）。

47 『南二荘』（E7号、77頁）。

48 J 入会20-21・27号。

本当の目的ならば、より早い時期に山論が発生していたはずと思われる⁴⁹。そして、太田村は小田村と一村だった時代から宝鏡山の入会地を利用してきたが、分村となった後も、小田村は長年太田村による入会地利用を反対していなかった。この事実と太田村背後の土浦藩の権威、さらに太田村に入会地がなかったという事情を鑑みると、太田村の入会権が認められる訴訟結果になると小田村としても予想できたはずであろう。太田村の伐採行為を容認してきた小田村にとって、太田村の入会権が訴訟によって認められても実質的な影響はないかもしれない。しかし、訴訟に費やす時間と費用も看過できない。それでも、小田村は入会の面で自らの利益になりそうにない山論を起こしたのである。

見逃してはならないのは、この山論は番水制をめぐる両村の齟齬とちょうど时期的に重なっていることである。また、入会地立入り禁止の宣言から鎌取の実行までの間は、用水が最も不足する日照りの期間であった。入会地も農業にとって、用水と同様かそれ以上に欠かせない重要な生産条件で、山論が長期化すれば、「太田村之儀少之馬草餌場も無御座、差当り馬飢かし、村も亡所ニ罷成」り、太田村の農業生産に大きな支障をきたしてしまう。したがって、史料に明言はないものの、いくつかの点から推測すれば、この騒動は、用水と入会地の利用にあたってまったく逆の立場にあった小田村が、山論を利用し、用水問題での太田村の譲歩を引き出す目的からとった行動だと見做すべきであろう。

小田村の後人はこの山論を回顧して、両村領主の力の強弱を指摘し、「（小田村之）賤民

のならい其实を察するなし」と酷評した⁵⁰。しかし、小田村の先人は決して察していなかったのではなく、背後の事情を看破したからこそ、入会をてこにし、太田村に用水での譲歩を迫ったのである。

残念ながら、山論直後、組合内部の用水秩序に変化があったか否かを確認できる史料はない。しかし、延享四（1747）年と寛延四（1751）年の村方文書には番水実施の記録が残っている⁵¹。

V、水論訴訟の歪み

ここでは幕藩が用意した水論訴訟という制度的枠組みをどう評価すべきかという問題を検討してみたい。

江戸時代の水論訴訟が司法的よりも行政的であったことは先行研究の指摘したとおりであるが、その理由は三代将軍徳川家光が道破した。即ち、「公奉行人の裁判と天下の裁判との異同あり。奉行の判はいかにも是非明白なるをもてその職とす。天下の判はしからず。たとへば堺論あらむに奉行ならば理をかたせ非をまけとす。天下の判は理非に拘らず。たとひ非分のかたなりともその地に秣場なくて土民艱困せば理あるかたの野地をもさきあたふるか、又は野銭を出さしむるか、とにかくその地の困窮せざらむをもて宗とす。是を天下の判といふ」⁵²。

用水が農村の死活に関わるので、理非よりも実情に即して政治的配慮を加えることが最善策であるというのが、その理屈である。問題は、政治的配慮という明確な境界をもたない行為には、他の要素が入りやすいことにあ

49 これについて、白川部（1990）は、「両村の対決が遅れたのは、小田村が太田村の親郷といわれ検地帳を同一にするほど近い関係にあり、太田村が、小田村の山野支配のなかで、入会を行うことで満足していたためである」との見解を示している。

50 『南二荘』（E7号、77頁）。

51 F：34、129頁。ただし、元禄十一（1698）年、それまで横山氏領であった小田村及び大形村の一部も土浦藩の知行地となったため、番水制は土浦藩の命令によって実現された可能性もある。

52 『大猷院殿御実紀』付録卷二（黒板・国史大系編修会1964：710頁）。

る。上のように、封建領主の力関係は水論訴訟に影響を及ぼす最も強力な要因であり、裁判の結果に歪みを生じさせている。

また、幕藩が用水の実情のみに配慮し、農村社会の水利秩序を合理的に是正しようとする場合においても歪みが生じかねない。

文政四（1821）年、旗本本多氏の支配を受けていた上菅間村と中菅間村の間で、融水をめぐむ水論が発生した⁵³。両村の用水は本来別々にあり、上菅間村は独自で堰を持ち、中菅間村は池田村・磯部村との組合堰から引水していたが、上菅間村用水の余水は中菅間村の西田耕地にも流れていた。当年七月、中菅間村が西田を流れる水を余水ではなく共用の水だと主張し、領主に願い出た⁵⁴。

村落間の融水は、用水合理化の手段として同一領内でよく見られる。たとえば、近世初期、笠間藩浅野氏の支配を受けていた沼田村では、日損のとき、浅野氏の代官が領内の大川口堀口というところから沼田村に用水を融通した。領主が旗本井上氏に変わった後も、旱害があったときは、同じ井上氏領の神郡村の堰から用水を取らせた⁵⁵。

他村の用水施設から順調に融水するには、二つの前提が必要である。一つは、同じ領主であること。領主が異なる場合、村落間の融水はきわめて困難になってしまう⁵⁶。元禄三（1690）年、沼田村が筑波山知足院領に変わり、これをきっかけに、井上氏領に止まった神郡村が沼田村の融水要求を拒否して水論出入となった⁵⁷。

もう一つの前提は、融水が旱損時に限られ

る一時的措置であること。一時的であるからこそ、用水を輸出する村にとっては、用水に対する専用権を失うことなく、損失も我慢できる範囲内で済むのである。しかし、領主が恒久的融水措置を講じようとするとき、用水の専用権を侵害される村落側は必死に抵抗する。享保十五（1730）年、土浦藩領の大形村が藩役人から前堀の水を同領新治郡田土部村へ引き入れるよう命じられたが、大形村は肯ぜず、領主に咎められ、抵抗した百姓が投獄された。結局、この一件は隣村名主の仲介で赦免され、融水の計画も白紙に戻ったという⁵⁸。

上菅間村も大形村と同様な反応を示した。中菅間村との組合堰にするよう、領主側から申し渡された上菅間村が反発し、幕府への駆込訴と駕籠訴を敢行した。しかし、この一件では、評定所が上菅間村独自の堰だと認めたものの、「早魃之年柄は格別、平年水不足之節は、上菅間村用水余水之内より用水引取口と訴答両村田境にて之分量を見、平均右之内式分通りハ中菅間村え流水いたし可申」と内済させた。

上菅間村には本多家分家の500石も含まれ、水論の中で分家側の村役人も領主へ働きかけたが、立場の弱い分家側の領主は何もできなかったという事情を考えると、この一件には権力的背景が絡んでいた面もあるが、基本的に幕藩は用水合理化の観点から解決しようと考えていたと思われる。ここで、村落間融水のあり方に注目したい。いずれの事例においても、幕藩が用水調整を図ろうとしていた地

53 J水利72-74号。

54 農業水利権の類型は、余水利用権・共用権・専用権の三つがある（渡邊1963：第四章）。余水が共用水かが不明確のまま、用水を利用する状態が少なくなく、争いが生じるに至って初めて当事者がそれぞれ逆の主張をすることがよくある（渡邊1963：129頁）。

55 J水利80号。

56 領有関係が異なったにもかかわらず、前述の北条村が大島村から融水してもらえたのは、「多分之金子を以用水無心」したからであるとされた（J水利12号）。

57 J水利80-83号。

58 『邑正便覧』（D63号、180頁）。

点は、水源の川ではなく、人工的に設置された用水施設であった。当時の技術的条件から言えば、用水施設で調整するのは比較的容易であるし、効果的にも水源で調整するのと同じかもしれない。しかし、用水権利の角度から見れば、二つの方法には大きな違いがある。自然流水に対して、上流優先などの主張はできるものの、私有することはやはり認められていなかったのである⁵⁹。位置的に自然流水に接していないなら別だが、ここで村落間の取水量を調整すれば、当事者も納得できるはずである。一方、自然流水が用水施設を通して人工流水に転じることによって、その人工的用水施設を設置・維持する村は、その人工流水に対する専有権が生じる⁶⁰。用水堀などの人工施設から用水を融通するのは、技術的に調整しやすいが、施設を設置・維持する村の権利を侵害してしまうことになり、結局、歪みの原因となった。

ここでもう一度第Ⅳ節で述べた元禄二年小田村の事例を別の角度から見てみたい。他の水論と比べれば、この事例には一つ大きな特徴がある。これ以外の事例では、水論当事者は最終的には幕藩による裁判で勝負しようとしていたのに対し、小田村は訴訟の枠組みを越えて鎌取という実力行動で解決を図ろうとした点である。山論自身は太田村の提訴に

よって裁判となったが、すでに論じたように、小田村の狙いは入会の問題ではなく、入会地での暴力行使によって用水問題を解決することにあつたと思われる。

かつて中世とくに戦国期において、水論を暴力で決着させるのは一般的なことであつた⁶¹。「合戦」と呼ばれるほど多くの死傷者が出ることも少なくなかつた⁶²。このような風潮は近世の初頭まで続いた⁶³。しかし、暴力による水論解決は豊臣政権及びその後の徳川幕府によって厳しく禁じられるようになり、違反する者に対しては死刑を処した⁶⁴。筑波地区においては、水論では見られないが、山論では死者の出た事例が二件、そのうち関係者が死刑に処された事例が一件確認できた⁶⁵。

一方、貝塚氏によると、「近世において禁止されたのは、なによりも、第一に紛争解決の手段における、第二に対人的な、暴力的制裁や報復という紛争解決手段であつた。一方、現実の社会のレベルにおいて、自己の利害を実現するための実力行使、特に對物的な、とりわけ自然の改変という側面での実力行使は一般的に存在していた」⁶⁶。こういった実力行使に対する幕藩の態度については、藤木氏の見解によると、「喧嘩停止令のワクを超えないかぎり、村の実力行使も違法とし

59 自然流水は徳川時代において、無主物であるとも支配者の領主の所有物であるとも考えられていた（西崎1927b）。

60 西崎（1927b）。

61 中世の村落は少なくとも十三、四世紀以降、村内の治安、近隣の村々との相論、領主や外敵への対応などのため、日常的に武力を発動できる態勢をそなえていたと指摘されている（藤木1997：131頁）。

62 たとえば、壬生晴富の書いた『晴富宿禰記』には、文明十一（1479）年七月、「去廿三日、江州北郡有用水之相論合戦、六百余人打死、希代次第也云々」との記録がある（宮内庁書陵部1971：108頁）。

63 『南二荘』で慶長十九（1614）年起きた小田村と東城寺村の山論を言及したとき、「此時山林及び田に水を漑くに出るものといへ共、得もの棒鎌の類携ひさるなく、争をこせハこれをもつて打合雌雄を決す、里人みな是を常とす」と述べた（E7号、60頁）。

64 詳細は高島（1976）・藤木（1985：第二章）を参照。なお、戦国期の分国法の一つである「塵芥集」にも「水闘静の事、用水の法にまかすべし。然に問答にをよび、人を打擲せしむる輩は越度たるべし。人を殺すにいたつては、是非にをよばず其成敗有べき者也」との条文が設けてあつた（石井はか1972：225頁）。

65 E7号、J入会23・27号。

66 貝塚（1997）。

て追及されはしなかった⁶⁷。つまり、近世の水論において、対人的暴力でない限りの実力行使は可能な手段の一つであったのである⁶⁸。たとえば、前述した寛政年間の大島・上菅間両村の水論が訴訟になる前、堰の高さを下げるよう強く求めていた大島村の人間と思われる何者かにより、上菅間村の堰が二度も放火された⁶⁹。

大島村は最終的に訴訟での解決を目指していたのに対し、小田村は訴訟ルートではなく、自力救済の道を選んだのである。番水制の問題をめぐる、小田村はかつて訴訟を起こしたが、背後にある領主の力関係の影響で小田村に不利な結果となった。この経験から幕藩の訴訟に不信感を抱くようになった小田村は、実力行使で解決しようと決心したのであろう。この事例は幕藩国家による水論訴訟という制度的枠組みの限界を示唆している。

おわりに

幕藩は、農村各地旧来の用水慣行に大変動を与えることは、かえって混乱を惹き起こしかねないとの思惑から、農村社会の用水秩序に関して意図的に画一的な立法を避けてきた。その権利関係の詳細な規定は、水論訴訟が提起された場合において、裁判役人の比較的自由な裁量に任せられ、水論裁判は司法的というよりも行政的なものであった。これが水論訴訟の政治化を招き、裁判に求められる公正性に影を落とした。一方、たとえ他の影響を排除して水利秩序の合理化のみを考慮した判定でも、用水施設をもつ村側の権益を侵害する場合があった。

政治化された水論訴訟において、各当事者はそれぞれもっていたリソースを駆使し、自

らの用水利益を守ろうとしていた。筑波地区の事例では、領主の権威、近隣村落の力、入会地及び相手村内部の騒動が水論戦略を実施するために利用された。こういったリソースは、村の内部にあるものもあれば、外部にあるものもある。また、社会関係に潜むものもあれば、入会地のような自然物もある。

そして、小田村の事例が示したように、歪みが生じかねない幕藩の訴訟に対する不信感から、水論を訴訟ではなく実力行使で解決しようとする村落の動きが水論訴訟の限界を暴露した。

なお、近世の水論は訴訟と実力行使以外、村方談合によって解決されたこともあるが、これについては、今後、改めて他の機会で論考したい。

〈参考文献〉

史料

（地域史料）

- A、明野町史編さん委員会編（1987）『明野町史資料第13集：明野の水と生活』明野町長
- B、茨城県史編さん近世史第2部会編（1971）『茨城県史料：近世社会経済編Ⅰ』茨城県
- C、国土地理院「地図と測量の科学館」編（2006）『いまに残る郷土の文化遺産：つくばの古地図』日本地図センター
- D、つくば市教育委員会編（2004）『つくば市史史料集第二編：村明細帳（下）』つくば市教育委員会
- E、つくば市教育委員会編（2008）『つくば市史史料集第五編：長島尉信』つくば市教育委員会

67 藤木（1997）：154頁。

68 渡邊氏は、法解釈論上、農業水利関係における実力行動を正当防衛ないし緊急避難として認める余地はありと指摘した（渡邊1963：41頁）。

69 J水利56号。

- F、つくば市教育委員会編（2010）『つくば市史史料集第七編：太田村御留（中）』つくば市教育委員会
- G、つくば市教育委員会編（2011）『つくば市史史料集第八編：村の年代記』つくば市教育委員会
- H、筑波町史編纂委員会編（1978）『筑波町史史料集第一篇：村明細帳』筑波町史編纂委員会
- I、筑波町史編纂委員会編（1979）『筑波町史史料集第二篇：筑波と天狗党』筑波町史編纂委員会
- J、筑波町史編纂委員会編（1985）『筑波町史史料集第九篇：水利・入会』筑波町史編纂委員会
- K、筑波町史編纂委員会編（1988）『筑波町史史料集第十一篇：近世の社会・政治編』筑波町史編纂委員会

（その他の史料）

- 石井進・石母田正・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一校注（1972）『中世政治社会思想（上）』岩波書店
- 宮内庁書陵部編（1971）『図書寮叢刊：晴富宿欄記』宮内庁書陵部
- 黒板勝美・国史大系編修会編（1964）『新訂増補国史大系（第四十巻）：徳川実紀（第三篇）』吉川弘文館
- 日本経済叢書刊行会編（1914）『日本経済叢書（巻一）』日本経済叢書刊行会

著書・論文

- 明野町史編さん委員会編（1985）『明野町史』明野町
- 大竹秀男（1951）「近世水利訴訟における『内済』の原則」『法制史研究』1号
- 貝塚和実（1997）「近世後期の地域社会の形成と領主の動向：利根川中流域の水論を中心に」『地方史研究』265号
- 笠間市史編さん委員会編（1993）『笠間市史（上巻）』笠間市

- 川島孝（1974）「近世用水争論の解決過程：河内国新大和川上流右岸を対象として」『歴史研究』（大阪府立大学）16号
- 喜多村俊夫（1950）『日本灌漑水利慣行の史的研究（総論篇）』岩波書店
- 小早川欣吾（1957）『近世民事訴訟制度の研究』有斐閣
- 齊藤茂（1970）「近世村落の成立と展開：土浦藩領常陸国太田村について」『地方史研究』107号
- 齊藤茂（1998）「天保期の旗本領：常陸国筑波郡旗本本多領の場合」『茨城県史研究』81号
- 白川部達夫（1978）「幕末維新期の村方騒動と主導層：『小賢しき』者について」『地方史研究協議会編『茨城県の思想・文化の歴史的基盤』雄山閣
- 白川部達夫（1990）「元禄期の山野争論と村」『徳川林政史研究所研究紀要』24号
- 鈴木邑江（1968）「旗本井上氏領における支配と村政の一考察：茨城県筑波郡神郡村を中心に」『立正史学』32号
- 陶山宗幸（1991）「江戸幕府の刑事内済：傷害罪の検討を中心として」『法制史研究』41号
- 高島緑雄（1976）「近世的用水秩序の形成過程：近江伊香郡・浅井郡用水の研究」『駿台史学』39号
- 筑波町史編纂専門委員会編（1989）『筑波町史（上巻）』つくば市長
- 土浦市史編さん委員会編（1975）『土浦市史』土浦市史刊行会
- 中田薫（1943）『法制史論集（第三巻）：債権法及雑著』岩波書店
- 西崎正（1927a）「徳川時代に於ける農業水利の権利関係（一）」『国家学会雑誌』41巻2号
- 西崎正（1927b）「徳川時代に於ける農業水利の権利関係（二）」『国家学会雑誌』41巻3号

畑中誠治（1970）「危機の深化と諸階層の対応」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史（第4巻）：幕藩制社会』東京大学出版会

春原源太郎（1965）「山村水論の特色と訴訟手続法：信州筑摩郡古見村・今井村評定所公事日記を中心として」『信濃』17巻8号

藤木久志（1985）『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会

藤木久志（1997）『村と領主の戦国世界』東京大学出版会

古島敏雄（1941）『日本封建農業史』四海書

房

古島敏雄（1963）「商品流通の発展と領主経済」『岩波講座：日本歴史12（近世4）』岩波書店

寶月圭吾（1943）『中世灌溉史の研究』畝傍書房

真壁町歴史民俗資料館編（2002）『江戸時代の真壁』真壁町歴史民俗資料館

渡邊洋三（1963）『農業水利権の研究（増補版）』東京大学出版会

（筑波大学大学院人文社会科学研究科
国際日本研究専攻）